



Ⓔ エキストラ募集にご協力を

お陰様でだいぶ人も集まり、ほぼ人数的にも確定に近い状況となりました。弦楽器では、7月3日現在、下記のような人数になっています。

1stVn 14
2ndVn 12
Va 10
Vc 6 (最低人数まで、あと2名)
Cb 4 (最低人数まで、あと2名)

ということで、チェロおよびバス奏者が大ピンチです。エキストラで出演していただける方を是非御紹介下さい。

(弦楽器パートリーダー一同：代筆広報)

Ⓔ 第11回選曲経過報告

♪ 指揮者および演奏会日程について

当団常任指揮者の金山先生は、当初演奏会予定の3月4日当日、米国にて仕事のため、次回演奏会は金山先生ではない、他の指揮者をお願いすることとなりました。

次回演奏会
2000年3月4日(土)
ティアラこうとう
指揮者 調整中

♪ 選曲について

選曲方針として着目したのは

- ・団員支持率(次回も参加してもらえ、特に弦楽器の人に)
- ・難易度

- ・集客能力
- ・費用

の4点でしたが、特に参加者の継続参加が強く望まれる状況ですので、「団員支持率=乗りたいたいと思ってもらえるプログラム」を重視しました。また、前回絞り込み結果のうち、「アメリカプロ」「ロミオとジュリエット」プロは、「金山先生の棒で演りたい」という意向があったものですので、次回以降への持ち越しとなりました。その結果、下記の3(厳密には4)案までに絞られました。

- (A) 絵プロ または ?プロ
メンデルスゾーン：フィンガルの洞くつ
ニールセン：交響曲第2番
または、前中差し換えて
J.シュトラウス：喜歌劇「こうもり」序曲
ブリテン：青少年の為の管弦楽入門
(語り付き)
上記いずれかの前中のセットで
ムソルグスキー：展覧会の絵

- (B)
ブラームス：交響曲第3番
デュカ：魔法使いの弟子
ラヴェル：ラ・ヴァルス

- (C) 運命と人生プロ
チャイコフスキー：交響曲第4番
ラフマニノフ：交響的舞曲

♪ 今後の進め方

団員支持率を最も重視する意味で、各パート内で意見収集をしていただき、決定は7月4日以降に持ち越しとなりました。

これは、プログラム単位でのアンケートの場合、「知っている曲の入っているプログラムだから」なのか「やりたい曲が入っているから」

なのか「プログラムそのものがいいから」逆に「知らない曲だから推さない」のか、などの要因が判然としないということがありますので、再度、意見のヒアリングを行っていただいています。この結果を参考にしつつ、再度、選曲会議にて決定となります。

なお、選曲会議は、誰でも参加できます。御意見のある方は、是非参加していただくか、パートリーダーに意見を伝えて下さい。

(企画&広報)

Ⓔ アンコール決定

♪ 曲目

6月6日(日)に行われた選曲会議にて、アンコールには、
ショスタコヴィチ：「ボルト」から
「全員の踊り」
が選出されました。皆さんからのアンケートでの得票数も多く、明るく賑やかで短すぎない、という点が評価されました。

♪ 楽譜について

楽譜は現在、全音ハイアーライブラリより取り寄せ中です。早ければ今日、遅くとも次回の練習までに配付します。

♪ 練習

アンコール曲の決定に伴い、アンコールの練習が既存の練習計画に組み込まれます。
4日(指揮：大貫さん) 譜読み予定
17、20、31日 練習(17、31はそれぞれ、管ののり番を考慮し、5番の前になる可能性大)

時間決定次第、連絡します。また、17日の状況で、20、31の予定は決定されます。

(企画：伊藤)

Ⓔ 参加費について

重要事項なので、毎号掲載です。

1. 予算案

今回の参加費案は、
一般：¥32,000-
学生：¥22,000-
となります。

詳細の予算案は、別途資料を参照して下さい。

(広報註：3号では学生¥20,000 となっていました但誤りでした。すいません)

2. 支払い期限

参加費の前納ぶん ¥10,000
6月12日(土)まで
残額(¥22,000、学生¥12,000)
7月17日(土)まで

一括で全額お支払いいただいてもOKです
ホール代や練習場代など、演奏会当日を含めて多額の出費が必要となります。事務局側で立て替える財力はありませんので、できるだけ早い納入をよろしく願います。

3. 支払い方法

以下の2通りの支払い方法があります。

- 現金での支払い：会計担当 金井(FI)に、練習時に現金で支払って下さい。
- 銀行振り込み：下記口座へ振り込んで下さい。振り込み手数料は申し訳ないですが自己負担でお願いします。

(会計：金井)

さくら銀行 麹町支店 普通 7196197
オーケストラ・ディマンシュ

13 独断と偏見のDISK紹介

(ショスタコーヴィチ編)

広報担当の独断と偏見に満ちたDISK紹介です。前号のコダーイに続いて、ショスタコーヴィチの5番を、集めも集めたり、全32種類を一挙公開！！「CD 持って無いから欲しいんだけど、何を買えばいいのかわからない」という方の参考になりますでしょうか... ？！

今回は入手困難なものも含まれていますが、御紹介したものは特に注記あるものを除いて全て広報所有です。試聴希望の方はどうぞお申し出ください。

ムスティスラフ・ロストロポーヴィチ / ナショナル交響楽団

1994 録音 [TELDEC] 0630-17046-2 (輸) 分売あり

DG への旧録からおよそ10年後の、全集の一環としての再録。音符の長さの処理など「ちょっと考え過ぎ？」みたいなどころ(特に2楽章冒頭)もあるが、全体的には一音一音に意味のある、非常に説得力溢れる演奏で名演といえよう。作曲者の生徒であり友人である指揮者に応えて、ナショナル響が好演。アメリカオケにしてはちょっと暗めの響きが曲と表現によくマッチしている。単に派手で激しい熱血漢的演奏とは全く正反対に、緻密であり、深い悲しみが臍腑を決る、暗い情念に満ちた演奏。この作品は歓喜を謳歌するものではなく、闘いの音楽であることを如実に感じとることができる。

エフゲニー・ムラヴィンスキー / レニングラード・フィルハーモニー交響楽団

1984 録音 [VICTOR(J)] VCC-40255

文句なしの一押しで必聴！。聴いた中では最も録音状態のよい最晩年のライブ盤(しかもステレオ)。対向配置で聴く第三楽章には感動必須。3部に分けられたVnの掛け合いが両サイドから迫ってくる。うーむ、DGとかDECCAとかの録音で聴いてみたかった！終楽章コーダのラッパのバランスもこれなら許容範囲。ここでのアフタクトをだいたい弱くとしているのはやはり意図的か？全体的な評は下記の66年盤と同様。一家に一枚、常備したい。

エフゲニー・ムラヴィンスキー / レニングラード・フィルハーモニー交響楽団

1966 録音 (83年と記載) [AUDOPHILE] APL101 503 (輸)

RUSSIAN DISK レーベルから出ているものと同一演奏のステレオ盤(83年録音と記載があるが誤り)。この盤に限らず、ムラヴィンスキーの演奏は何れもこの作品を語るときには外せない演奏のひとつ。『証言』の中でなんといわれようと、やはり初演を指揮して以来、この作品の演奏者として正統とされてきたことが肯(うなず)ける、説得力ある演奏。速めのテンポ設定と硬質の音色が、静謐さ・凄絶さをよく表現しており、畏怖さえ感じる。一切の感傷性を排したまさに峻厳たるショスタコーヴィチ。必聴！。金管吹きにとっては、終楽章コーダの金管のバランスにはやや不満(特にラッパのへなちょこぶり)が残るが、そういったものを差し引いても余りある。なお、この作品が対向配置で聴ける貴重なステレオ録音のひとつである。

エフゲニー・ムラヴィンスキー / レニングラード・フィルハーモニー交響楽団

1954 録音 [BMG MELODYA] 74321 29404 2 (輸)

ムラヴィンスキーはこの作品をことあるごとに演奏し(レニングラードPOとだけでも百回以上)録音も多いが、これはモノラル時代のもの。デジタルリマスターで、ノイズも少なく聴きやすい。峻厳さは相変わらず。終楽章第2主題をラッパソロが朗々と歌うところに感動する。終楽章の練習番号128番の四分音符の処理の仕方は、筆者が長年夢見てきた理想の処理に近い。フルシチョフによるスターリン批判以前の録音であることか

ら、ムラヴィンスキーはスターリン体制時下からフィナーレを歓喜ではないと考えていたことがわかる。

エフゲニー・ムラヴィンスキー / レニングラード・フィルハーモニー交響楽団

1978 録音 [VICTOR] VICC-40118 ~ 20

この作品の定盤として君臨する、ムジークフェライン(ウィーン)でのライブ。他の録音と比べてみても、基本的なコンセプトは一貫していることがわかる。終楽章コーダの金管は相変わらずへなちょこだが、他の盤でも同様なので、どうも意識的にそうやっているようだ。実際、コーダ以外の個所では突き刺さるような喇叭が堪能できる。

キリル・コンドラシン / モスクワ・フィルハーモニー交響楽団

1964 録音 [BMG MELODIYA] 74321 19845 2 (輸)

ムラヴィンスキーと並び、この演奏を語らずしてこの作品は語れないのではないだろうか。終楽章冒頭およびコーダのテンポ！単に「カッコいい」だけの演奏をされがちなこの曲の真価を引き出している点で、ムラヴィンスキーに一歩もひけをとらないだろう。交響曲13番(『パビ・ヤール』)の初演以来、晩年の作曲者が全幅の信頼を寄せていたこともうなずける。これは全集のうち一枚だが、現在存在するショスタコーヴィチ交響曲全集の中で、唯一、作曲家存命中に完成されたこの全集は、第一級の輝きを持っている。アンサンブルの乱れや音色の粗さなどに気をとられると、この全集の価値を見誤る。

ゲンナジー・ロジェストヴェンスキー / ソヴィエト文化省交響楽団

1984 録音 [BMG MELODIYA] 74321 49611 2 (輸)

(旧)ソ連オケのパワーを如実に実感できる凄演。テンポ的にもだれたところがなく、また録音もよい。何を聴いても、デジタル録音で聴くあのロシアン金管サウンドにいやが応にも血が滾(たぎ)る。しかしカッコイイだけではなく、その硬質なサウンド故に作品の持つ静謐さと凄絶さをも感じさせる。やはりこの曲は歓喜の曲などではない！ロジェヴェン氏はスヴェトラ大先生と並び現役ロシア人指揮者の中で、往年のロシアオケパワーを今だに感じさせる指揮者だ。)このコンビによる交響曲全集が国内盤廃盤の今、廉価輸入版で再発された(しかも珍しい管弦楽曲も含んでいる)意義は大きい。文化省響はもはや解散してしまっているようだが、なんとも悔やまれる話(かつてベルリン芸術週間での10番が超名演だった)

ベルナルト・ハイティンク / アムステルダム・コンセルトヘボウ管弦楽団

1981 録音 [LONDON] POCL9255 ~ 9266 分売あり

ロシアオケにあまり馴染みのない方には、お薦めできる。交響曲全集としての出来もよい。オケの巧さ、録音のよさ、ともに文句無し。この演奏は、それまでいかにも“カクメイ”という単語に似合った演奏が多かったこの曲の新たな面(室内楽的な精緻さ、悲哀漂う陰影、重苦しいテンポなどなど)に焦点を当てたものとして特筆すべきものである。交響曲全集としては西側演奏家による初の全集ということと、ヴォルコフ編『ショスタコーヴィチの証言』発表の直後にリリースされ始めたということで注目を集めたが、実は『証言』以前に全集として企画・録音開始されていることに留意すべき。つまり、スコアを純粋に読み解いた結果の表現と見なせる。ある意味で西側におけるこの作品の真の受容はこの演奏から始まったといって過言ではない。

ネーメ・ヤルヴィ / スコティッシュ・ナショナル交響楽団

1988 録音 [CHANDOS] CHAN 8650 (輸)

これもお薦めできるディスクだ。オケもよく鳴っているし、テンポ設定やバランスなどもよい。現代におけるスタンダードな演奏として位置づけてよいのではないだろうか。特に終楽章のテンポ設定と、金管セクショ

ソの吹きっぷりが気に入った。ちなみにタワーレコード新宿店ではこの曲のファーストチョイスになっている。

一方、併録の組曲『ポルト』は、34年版ではなく、アトヴミヤーン編の『バレエ組曲5番』で、長らくその作品の唯一のCDだったが、全体としてはよいものの、80年のコンドラシンノ響をリアルタイムに知るものとしては、「終曲：全員の踊り」のテンポは許し難い。

エンリケ・パティスノロイヤル・フィルハーモニー管弦楽団

1990録音 [ASV] CD DCA707 (輸)

パティスはあまり知られていない指揮者だったが、結構豪快にやってくれるのでお勧め(手に入るものではNAXOSレーベルのローマ3部作や交響的舞曲(ラフマニノフ)、シェヘラザードなど。ASVレーベルからメキシコ作曲家管弦楽曲集なども)。ここでは重量感のあるよい演奏だ。オケの音がよくブレンドされていてよく鳴っているし、残響など録音面もよい。併録の『ロシアとキルギスの民謡主題による序曲』、『ノヴォロシスクの鐘』、交響詩『十月』も名演(特に『ノヴォロシスク』はオルガンのような響きがして感動)。

レナード・バーンスタインノウィーン・フィルハーモニー

1979(?)録音(記載なし) [FIRST CLASSICS] FC-103 (輸)

ウィーン・フィルが熱い！前半は多少エンジンのかかりが遅いようだが、多少のズレや乱れはなんのその、後半2楽章の凄みはこの組み合わせのマーラー並み(終楽章コーダでのティンパニの勇み足には失笑するが)、ただしカラヤンが好きな人にはお勧めできない。バーンスタインのこの曲のテンポ設定は終楽章コーダの超高速が特徴的だが、ここでも同様。晩年(80年代以降)、DGへ1・6・7・9番を再録(いずれも名演)していたが、この作品をDGで再録せずに世を去ったのが悔やまれる。その時にはコーダはどのようなテンポになったのだろう。ちなみに、たぶん放送録音の海賊盤。

アンドレ・プレヴィンノシカゴ交響楽団

1977録音 [EM] 5 72658 2 (輸)

ファーストチョイスとされた名演。録音・演奏ともによし。シカゴのサウンド完璧！表現にもそれほど無理なところはない。過度に暗いわけでも熱血的でもなく、ある意味でムラヴィンスキーと対極のロマンティックなショスタコーヴィチといえよう。白眉は第一楽章のクライマックスと第三楽章。特に第三楽章が秀逸。終楽章コーダのテンポは当時の一般的速度で、まあ仕方ないが、最後の大見得が決まる。「プレヴィンはよい！」ことを再確認した。因にプレヴィンは他にRCAにLS0とのリリースもある(下記参照)。

ここで紹介した盤は、EMの名録音を集めたFORTEという2枚組廉価版シリーズでのリリースで、ショスタコーヴィチ4番と、LS0とのプリテンの『鎮魂交響曲』、『ピーター・グライムズ』の「4つの海の間奏曲」「パッサカリヤ」が併録。これは文句無しの超お買い得&名演ばかり！

アンドレ・プレヴィンノロンドン交響楽団 (Pos半澤氏所有)

1965録音 [RCA VICTOR] 6801-2-RG

全体的にはEM盤と同様。違いはアメリカオケとイギリスオケの響きという点のみ。曲調にはEM盤のほうがあっているかも。併録はラフマニノフの交響詩『死の島』という、ちょっと暗あゝいCD。

リッカルド・ムーティノフィラデルフィア管弦楽団

1992録音 [EM] CDC 7 54803 2 (輸)

とにかく「政治とか社会とか、こ難しいことは考えずに、パーっとやっちゃえ」って感じの、いかにも陽気なイタリア人がアメリカオケを振ったという演奏。とはいえ、音響体としては結構気に入っている。もしかして「音楽に全てが語られている」のを最も体現するところなのか？！ただ、第一楽章のクライマックスは

なかなかよい。併録は、これまた何も考えてない演奏の『祝典序曲』。この盤はアメリカンサウンドを聴くものど心得るべし。

ロリン・マゼールノクリーヴランド管弦楽団

1981録音 [TELARC] CD-82001 (輸)

バーンスタインとはまた違った強烈な個性を持つマゼール、ここでもそれはいかんなく発揮されている。だが、全体としてはやや大味な印象を受ける。テンポ設定としてはバーンスタインに近い。作品への感情移入はあまりなさそうだが、かといってクールに徹するわけでもなく、可もなく不可もなしといったところか。録音のよさはTELARCレーベルならではの、オーディオファンには向いている？併録が同じコンビの『春の祭典』(これは良い)という、お買い得廉価版。

スタニスラフ・スクロヴァチェフスキーノハレ管弦楽団

1990録音 [IMP CLASSICS] PCD 2018 (輸)

一言で言うと「変わっていておもしろい」。一部に熱烈なファンが存在するスクロヴァ先生、やってくれます。これ以上は表現のしようが...と思っただ、気をとりにおしてみると...

スコアに隠された意外性を浮き彫りにする瞬間と、突然挿入される不自然な流れが同居。何故そうなるのかは全く解らないが、やっている事は明確にわかる。ムラヴィンスキーの54年盤と同様、練習番号128番には拍手。もう一息、テヌートが真四角な音形なら万々歳だったが。迷盤として、コレクターズアイテムといえよう。

マキシム・ショスタコーヴィチノロンドン交響楽団

1990録音 [COLLINS CLASSICS] SC0013 (輸)

作曲者の息子による演奏。「悪くはない」というところか。遅めのテンポ設定がマイナス面になって、時折、冗長さを感じさせる音楽になってしまっているのは残念。このテンポならもっと一音一音の処理を綿密にできる筈。ロンドン響はロストロポーヴィチだともっと炸裂してくれるのだが...。併録の『祝典序曲』主部開始時点のスピードは賞賛に値する。

マキシム・ショスタコーヴィチノソヴィエト国立交響楽団

19??録音(記載なし) [BMG MELODIYA] 74321-32041-2 (輸)

上記のLS0との録音ではいまひとつと感じたが、こちらは熱い演奏といえよう。テンポはやはり遅めだが、冗長になるぎりぎりの線で踏みとどまっている。ただ、付点リズムの処理の仕方(装飾音符のように扱っている)がわしの趣味ではない。細かな部分での詰めが甘いような印象をうけるが、父親の音楽への熱い思い入れに免じてよしとしよう。録音バランスというと打楽器がかなり遠くて弱いのが(特に両端楽章では)致命的...。併録はバレエ『黄金時代』の「ボルカ」と映画音楽『ミチューリン』(『呼応計画の歌』も用いられている)。

マリス・ヤンソンスノウィーン・フィルハーモニー

1997録音 [EMI] CDC 5 56442 2(輸)

WPhとショスタコーヴィチって、ちょっと違和感のある組み合わせだが、バーンスタインの6番&9番のような名演があることを考えると、この演奏にはやや疑問が残る。ちょっと表現にあざとさが見え隠れするところが今一つ気に入らない。ヤンソンスは、86年のレニングラードPOとのサントリーホール公演(死の直前のムラヴィンスキーの代役を務めた)では名演だったのに...(筆者の生ロシアオケ初体験だった)。併録の『室内交響曲』Op.110a(弦楽四重奏曲第8番のオケ版編曲)も心なしか生ぬるい。

ユーリ・テミルカーノフ/サンクト・ペテルブルグ・フィルハーモニー交響楽団

1995 録音 [BMG] 09026 68548 2 (輪)

対向配置での演奏が聴ける録音。このコンビでのBMGへの録音は、あまり外していない(ラフマニノフとか、『森の歌』とかプロコフィエフ5番とか)ので、それなりに安心して聴ける。冒頭の弦楽器にはだいぶ思い入れを感じたが、全体を通じての緊張感は持続しきれないようだ。全体的には、好きなスタイルの演奏ではある。併録に9番。

ユーリ・テミルカーノフ/ソヴィエト国立交響楽団

1981 録音 [RUSSIA REVELATION] RV10025 (輪)

テミルカーノフって(いくつかの例外を除き)なんとなくイマイちな気がするんだけど、これまた豪勢な演奏のライブ録音。特に打楽器の「とにかくでかい音で叩く!」というポリシーがよくわかる演奏で、派手! 内面的なものが全く感じられない。ライブ音源ならではの個所として、4楽章にラッパが笑わせてくれる。目の前が白くなって舞い上がってしまったのか?

ウラジミール・フェドセーエフ/モスクワ放送交響楽団

1991 録音 [VICTOR] VICC-74

1991年の軍事クーデター当日に録音されたもの。というタスキにひかれて買ってしまったのを大変後悔した、最悪盤。かつては期待通りにやってくれたはずのフェドセーエフ、一体どうしてしまったんだ! テンポ・バランスとも激怒もの。特にトロンボーンが何も聞こえないのは一体どうして??? 唯一、終楽章冒頭一小節のチューバだけはたいへん偉い。ちなみに、この後、CANYONレーベルへ再録しており、それは未聴。

ゲオルク・ショルティ/ウィーン・フィルハーモニー

1993 録音 [LONDON(J)] POCL-5251

ショルティ初のショスタコーヴィチ。この後、1・8・9・10・13・15番を録音している。テンポ設定は比較的スコアに忠実といえる。最後のテンポはおそらく♪=188の指定どおりを目指したものだろう。ポイントとしては、練習番号114番ちょうどのVn2拍目を「譜面通り」変口音で弾いているところ。一瞬「おお?」とびっくり。これをやっているのは、聴いたところでは他にはアンチェル/チェコフィルのみ(あ、ディマナンシュもそうだ!)

ショルティのショスタコーヴィチは一般には「なんか違うんじゃない?」という評価が大半だが、決して中身の無い音楽にはなっていないと思う(8番などは凄い)。ここでも、じっくり聴いてみれば、いい演奏であることがわかる筈。個人的趣味でいえば随所に疑問があるとはいえ、第三楽章の悲壮感などに心打たれるものがある。ただし、その反面「スコアを見乍ら聴くのに最適」という印象が拭えないのもまた事実。W Phが名演。オケがシカゴだったら更に凄い金管が聴けた? 併録がメンデルスゾーンの4番という、若干異質な組み合わせだが、これはかつての来日公演そのままのプログラムである。

エフゲニー・スヴェトラノフ/ロシア国立交響楽団 (Hr坂本氏所有)

1992 録音 [CANYON] PCL-00164

東京文化会館での来日公演(後述)が、筆者にとっての理想の演奏だった。ここでの録音はその来日公演とは、バランス・テンポなど、ほとんどの点で異なる表情を見せていて、MELODYAへの78年録音(下記)に近い。違いは、録音のよさくらいか。なお、併録の『祝典序曲』は、往年のMELODYA盤(CD未出)のスピード感・迫力にやや及ばないものの、現時点で入手できるものうち最良といえよう。このためだけに入手する価値はあるとみた。

エフゲニー・スヴェトラノフ/ソヴィエト国立交響楽団

1978 録音 [ZYX] CLA10011-2 (輪)

スヴェトラノフは後にCANYONレーベルに同じコンビで再録(前述)しているが、これはMELODYAへの録音。旧ソ連音源にありがちな不思議な録音で、残響やバランスなどが人工的だが、往年のロシア(ソ連)オケの狂暴さがよく感じられる。スヴェトラノフの演奏はどちらかという感情的な思い入れはあまりなく、スコアに書き付けられた音をそのまま剥き出しにするというものに近い。結果として、構築された音響体そのもので圧倒することになる。だが、ここでは録音バランスの悪さが足を引っ張っており、特に打楽器群の遠さが悔やまれる。御大としてはやや凡庸な演奏か?

ZYXレーベルはBMG MELODYA音源のオーストリア国内廉価盤レーベルのようだ。この盤は「Russian Art」というシリーズの奇麗なジャケットで、9・7番(これは超名演)を併録した通常価格の2枚組み。

ユージン・オーマンディ/フィラデルフィア管弦楽団

1965 録音 [CBS] SBK53261 (輪)

このコンビはショスタコーヴィチの交響曲のいくつかを米国初演している。ひとことで云うなら、力演。今となっては過去のスタイルの演奏と看做されてしまう部類だろうが、(ムーティ盤にもいえることだが)オケのサウンドがよいということは結構重要なポイントだ。往年のスタンダードであったといえよう。併録に『黄金時代』の「ポルカ」と、プロコフィエフの『三つのオレンジへの恋』組曲という、お買得廉価盤。

カレル・アンチェル/チェコ・フィルハーモニー管弦楽団

1961 録音 [日本コロムビア] COCO-6766

SUPURAPHON音源の廉価盤。往年のチェコ・フィルのサウンドはいつ聴いても特徴的で、特にクラリネットのヴィブラートには身悶えさせられてしまう...(^非常に男性的で質実剛健な演奏。第一楽章の練習番号38番2小節め4拍目の金管の♪のテヌートには最大級の賛辞を贈りたい。ここはやっぱりこうじゃなきゃ!(ちよいとやりすぎではあるが))

このコンビは他にも名演を残しているが現在では現役盤としての入手がそれほど容易ではないのが悔やまれる。冷戦時代の東側オケの演奏と云うことで、貴重な記録といえよう。なぜかチャイコフスキーの『1812年』が併録。どうせなら『祝典序曲』にしてくれればよかったのになあ....

シャルル・デュトワ/モントリオール交響楽団 (Pos半澤氏所有)

1994 録音 [DECCA] 448 122-2 (輪)

比較的スコアに忠実な演奏といえる。デュトワとショスタコーヴィチというのは、異質な組み合わせに思うかも知れないが、実は結構相性がよいようだ(10年近く前にかつてFMで放送されたユンゲ・ドイチェ・フィルを振った13番など名演だった)。聴いてみたところでは、可もなく不可もなしといったところ。どちらかという一般的なといえよう。トロンボーン吹きにとっては随所で示唆に富む。併録は9番。

クルト・ザンデルリンク/ベルリン交響楽団

1982 録音 [徳間ジャパン] TKC-15032

ザンデルリンクのショスタコーヴィチは全般的に定評あるものようだが、...? 個人的には、いまひとつ生ぬるい感触。終楽章のテンポ設定にもやや疑問が残る(超快速でスタートする)。たしかに、金管をやや控えめにしたオケ全体の音色バランスは新鮮味があるが、逆にこの音楽の持つ凄惨さはっや失われているように思われる。「バカ吹きしない」という意味では、世の金管奏者にとっては見習うべきところがある。まあ、¥1,000の廉価盤なんで、許せる。

